

老年期における表示の明視性の研究(6) — レシートとカードの場合 —
 東京家政学院短大 今井弥生 ○井澤尚子 高野美栄 文化女子大
 盛田 真千子 仙台白百合短大 鈴木良子 東京家政大 長塚こずえ

目的 レシート表示は購入時期、価格、計量等、消費者に伝える責務がある。

本報は高齢者が日常手にするレシート及び多様化する各種カードにおける表示の可読性について検討し、高齢者が日常生活でわかりやすい表示のあり方を提供する。

方法 レシートは、公的・医療・販売の3機関に分類し、特に手にする頻度の高い販売機関のものに注目した。1992年9月より、関東地区 285店から無作為に1000枚(印字のものに限る)収集し、デパート・スーパー・小売りに業種分けしたものの文字色、台紙色を測色。続いて文字の大きさを測った。カードは、テレホンカード・乗車カード・キャッシュカード・医療カードに分類し、挿入記号、文字の大きさを測定。さらに、文字色、台紙色、一見色(目立つ色)の測色を行った。試料の視感比較方法はJIS Z 8723に基づき、色票はJIS Z 8721(標準色票)を用いた。

結果 試料としたレシートの文字色は青紫と黒に大別される。青紫が主流で明度差0.5~2.5の濃淡がみられた。台紙色は主に白で、再生紙、感熱紙にわずかな色味がみられた。文字の大きさは4段階(3.7ミ)、釣り銭、合計を強調したものが多く、書体により可読性が異なる。カードは種類の識別有無が判別できず、特にテレホンカードはデザイン等が優先し、挿入記号、カード識別の表示がないものがある。前回の報告で老年期の表示は白地に明るい青、紫文字の明視性が低かった。

以上、レシートの印字は黒、または濃い青紫、再生紙には黒文字で、文字は大きくする。付加価値のデザインよりも高齢者には実用性を重視しなければならない。